

Title	ヒルデ・リゴーディアス=ヴァイス フランスにおける労働者調査(一八三〇年-一八四八年)
Sub Title	
Author	渡邊, 国広
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1954
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.47, No.2 (1954. 2) ,p.193(85)- 194(86)
JaLC DOI	10.14991/001.19540201-0085
Abstract	
Notes	論文紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19540201-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

發展に對し阻止的な役割を果した企業家の性格の第一のものとして、フランスの企業家が、新しいもの、未知なものを極端に嫌う保守的な人々であつたという點を強調している。安全こそフランスの企業家の最大の關心であり、成功のために、おそらくとも安全でなければならないと考えるのであつた。フランスの企業家にとつては、このように、安全が第一であつたから、安全な市場として、外國との競争から完全に遮斷された國內市場を、フランスの企業家は欲した。現に、フランスの産業は、法外に高い關稅によつて保護されていた。そして、このことが、フランスにおいては、企業を維持するための基礎となつたのであつた。企業家は、政府を一種の父と看做し、その腕のなかに保護と掩護とを求めようとしたのである。この根本的に子供っぽい態度に、當時の企業家の特徴の一つがあるのである。

第二の特色としては、フランスの企業家が、資金面において、他人資本の流用を極力避けた點にある。企業は、フランスにおいては、資本的に完全に獨立していた。擴張のための費用は、普通、利益が再投資されるか、もしくは親戚や友人から調達されるかであつた。このことは、逆に、新人の資金調達を、非常に困難なものたらしめた。唯一の財産が頭脳であり、獨創力であった新人の進出は、フランスにおいては不可能に近く、資本は在來の企業と結びつくことによつて、新規の發足を阻止しようとしたのであつた。

基本的な企業の單位は、とにかく、このように、家族であり、この家族は、より大きい全體の一部であつて、その性格が、フランス社會の傳統により規制されることは、申すまでもない。企業家が、フランス社會において、いかなる地位を持つていたのか、又企業家が、フランスという社會において、どんな眼をもつて見られていたのかといったようなことが、フランスの企業家の性格を規定する要素として、重大な意味を持つて來るように思われる。

端的にいつて、フランスにおいては、企業家は、常に、非常に低い位置にあつた。企業家は、社會の最下位にあつたといつても決して過言ではなかつた。フランスの地主は、企業家を敬遠し、企業家のなかに、破壊的な要素のあることを指摘した。成り上り者の絶え間ない欲望に對して、地主は、出生の名譽を誇つた。貨幣の威力に對して、地主は、土地の強い安定を誇つた。しかも企業家が、地主階級のかかる名譽の誇示によつて幻惑されたということは、企業家が、フランスにおいては、最下位に位置していただけに、特に甚だしかつた。この點は、企業家が、いかなる手段によつても、地主階級の一員たらんとした事情から明白である。企業家は、土地最も安全な投資場所と考え、社會的地位を獲得するための基礎と思つて、企業に対する投資よりも土地に対する投資に、より積極的になつたのであつた。企業家は、フランスにおいて傳統的に尊ばれていた農業の進出によつて、守銭奴とののしられ、利己主義者と呼ばれていた。

つまり、フランスの企業家は、企業の發展に對して積極的でなかつたのである。むしろ積極的たり得なかつた。保守的な點といい、知人や親戚から資金の融通を受けたため、かえつて大きなことができなかつた點といい、とにかくフランスには、反資本主義的と名づけることのできるような雲霧が、一般的であつた。生産は、使用のためであつて、利益のみではないという中世的な考え方方が、フランスにおいては、依然として、その妥當性を失なつていなかつたといつても過言ではないくらいであつたのである。

では、産業革命時代におけるフランスの企業家を、かかる性格の持主としてつくり上げる上に、影響した諸要因は何か。フランス社會の構造が、産業革命下のフランスの企業家の性格を、規定することは疑いないが、ランデス氏は、本論文において別の角度から、この問題を掘下げようとしている。

そのような條件の第一のものとして、ランデス氏は、フランスの企業が、家族的基礎の上に組織され、企業家が、その企業を、生産のための機構とも、富を無限にするための手段とも考えず、家族の地位を維持し確保するためのものと考えていた點を指摘するのである。いかなる場合においても、企業は、それが自體目的ではなく、目的に達するための手段であつた。そして、フランスにおいては、富の維持に對しても、富の創造に對してと同じ程度の關心が拂われていたのであつた。

『フランスにおける労働者調査
(一八三〇年—一八四八年)』
(Hilde Rigaudias-Weiss, "Les Enquêtes Ouvrières en France entre 1830 et 1848," Paris, Librairie Félix Alcan, 1936 pp. xi + 262.)

第十九世紀に入つてフランスは産業革命を経験した。しかしフランスにおいて産業革命が本格化したのは一八三〇年以降であり、七月王朝に次いで出現した二月王朝下のことに屬した。正にこの時期にフランスにおいては資本家階級の勢力が急速に擴張して來た。同時に工場労働者の數も著しく増加したが、その生活はすこぶる悲惨なものであつた。労働者はその地位の向上を目指して資本家に對抗して團結し、階級対立が新しい社會不安の原因となつた程であつた。

しかも一部の急進論者が労働階級の不満を煽つたことはいう

までもない。「資本家だけが法律の制定に當っていること、資本家のようだ市民の法律をつくる以外に、我々は不幸のきずなかで最後まで逃れ得ないことを忘れるな……。我々は自分等の不幸なことを知つていて、……團結もせず、運動もしない」「やがて烈しい騒動が労働者の間から起るだらう……。」或る者は突然の職の取上げを、又或る者は賃銀の切下げを歎いた……。皆が機械の恐るべき威力を呪つた……」、「労働者が苦しくて騒いでいるのに、資本家は勝利に酔つている」。」のような警句に刺戟されて、事實労働階級はいかなる手段に訴えても自己の立場を主張しようとした。そして早くも一八三四年にはリヨンの絹織工の大暴動があり、又その他の織物都市においても待遇改善を競つて労働者の動きが活潑になりつつあつたのである。

かかる事態に對して二月王朝は無関心であつた。むしろ慈善家・經濟学者が労働者問題について非常な關心を寄せ、二月王朝下における工場労働者の實態を詳細に傳える調査報告書をいくつか残している。すなわち、*Blanqui*, "Des classes ouvrières en France pendant l'année 1848. Paris, 1848. Buret," *De la misère des classes laborieuses en Angleterre et en France. Paris, 1840, 2 vols.* Ducpétiaux, "De la condition physique et morale des jeunes ouvriers et

des moyens de l'améliorer." Bruxelles, 1843, 2 vols. Kahan-Rabecq, "Les réponses havraises (Le Havre) à l'Enquête de l'Assemblée Nationale. La Révolution de 1848," 1934. Villeneuve-Bargemont, "Economie politique chrétienne." Paris, 1834, 3 vols. Villemé, "Tableau de l'état physique et moral des ouvriers employés dans les manufactures de coton, de laine et de soie," Paris 1840, 2 vols. 等であるが、なかでもルメの報告書が兒童雇傭を制限する法律の制定に役立つた點、又労働者の住宅問題について世論を喚起した點にその重大な影響を認めはするが、しかし女史によれば、ヴィレルメはあくまでも保守主義者であつたのであり、労働者の不幸を終始その不行跡に歸していたことがその何よりの證據だというのである。むしろ女史は、ビュールのなかに進歩的な要素を求めた。現にビュールは、貧困の原因を富の分配と労働の組織とに結びつけられて考へている。又貧困を解消するためには世界的な規模の闘争が必要であると強調した點、女史によれば、ビュールは正にマルクスの先驅者であつたのである。

(渡邊國廣)

經濟學關係文献目錄

(昭和二十八年八月一十月)

- 理 論 (學說史・經濟思想)
- * 景氣變動論 波多野鼎著 B6一二八頁 一一三〇圓
 - * 劍橋學派及び北歐學派の經濟變動理論 青山秀夫著 二三二頁 A5 三五〇圓
 - * 經濟進歩の諸條件 上 クラーク著 大川一司他譯篇 A5 二九六頁 五六〇圓
 - * 經濟學入門(創元文庫) ジイド著 堀江忠男譯 B6 一二四頁 二五〇圓
 - * 平和と戰爭の經濟學 オートン著 堀江忠男譯 新評論社 A6 一三四頁 六〇圓
 - * 経済原論 宮田喜代藏著 A5 三三八頁 四三〇圓 同文館
 - * 経済觀測(文庫クセジュ) ノーヴィー著 松田孝兒譯 B6 一四四頁 一二〇圓
 - * 經濟學原理(全訂) 高田保馬著 A5 三九五頁 四〇〇圓 圆
 - * 經濟研究者の數學解析 上 アレン著 高木秀玄譯 B6 三五一頁 四五〇圓 有斐閣
 - * ジョーンズの經濟學(一橋大學經濟研究叢書) 大野精三郎著 A5 二七一頁 三二〇圓 日本評論新社
 - 經濟學關係文獻目錄